

随想

第171回

地球温暖化に伴う気象異変により、多くの動植物が消滅しつつあり、生態系が乱れる傾向にあります。

文部省唱歌「ふるさと」の「兎追いしかの山、小鰯釣りしかの川」に代表される少年の日の故郷の想い出は、人生の原風景として大切なものであり、大事にしたいものであります。

顧て、六十年ほど前には、小学校の行事としてウサギ狩りがあり、児童が勢子（鳥獣を追い立てる役）となつて、野ウサギを捕獲したものであります。

一方、夏休みなどには、一日中、川で遊ぶ中で、白ハエ釣りでの感動は、心躍る楽しいものであります。しかし、最近では川の魚が少なくなつたようで、橋の上から川をのぞいても、魚影は薄いようであります。生態系を考える上で、食

物連鎖の頂点に立つワシやタ

カなど、猛禽類の保護も大変重要なことであります。身近な河川の魚類の保護も忘れてはならないことでもあります。

そこで考えますのは、安全な川と魚のすむ川の両立であります。

最近の治水事業は、水害を防ぐため、素晴らしい工事が行われ、安全性が高まつておりますことは、誠にありがたいことでもあります。



しかし、河川工事により、流下能力は飛躍的に向上いたしますが、魚類の生息という点から見ると、ふちが無くなり、瀬ばかりの川となり、変化の少ない点が気になります。

本来、川は自然の水の流れにより、「瀬とふち」がバランスよくあることが理想であると存じます。

そして、適当な「ガマコ（魚の隠れ場所）」が必要であ

ります。

そのため、先年、市内で国の直轄事業として行われた土岐川の抜本的な河川改修事業に際して、魚のすみやすい川づくりのため、特に長い伝統を誇る「木工沈床」や「聖牛」といった戦国時代以来の在来の水制工法の採用を、国土交通省にお願いいたしましたところ、快く引き受けていただき、小学生も体験教室に参加して、見事に完成することが

生物多様性について

生態系の保全に想う

できました。

今後、岐阜県などにもお願いをいたしまして、水害の無い安全な川づくりとともに、河川を大切な生態系を守る貴重な都市空間と位置づけ、瀬とふちのバランスの取れた魚のすみやすい川づくりも視野に入れて、一層努力したいと存じます。

人間の生活環境を考えます上で、身近な自然の生態系の保全に細心の注意を払い、昔

からの動植物や魚介類が消滅しないよう、いわゆる生物の多様性が維持できる地域社会を、みんなで作りたいものであります。

特に、市民の皆さんのご協力により、本市の下水道整備事業は急速に進んでおり、河川や湖沼など、公有水面の水質改善が進みつつありますだけに、魚介類を含む動植物のすみやすい地域づくりは、究極的に人間の生活にも大変意

土岐市長 塚本保夫

義深いものになると存じます。ところで、白ハエが少なくなつたようでありますが、ドウゼンとかギバチ（アカザ）などの魚は、今もいるのでありますでしょうか。

一方、水鳥は増えております。

昭和三十年、土岐市が誕生いたしました五十年前ごろに、初めてこの地方で白鷺を見つけた記憶がありますが、今では青鷺、五位鷺に川鵜までも日

常目にすることができ、季節によっては肥田川の滝ヶ洞で鴛鴦のペアも見掛けることができますし、カワセミもよく見掛けます。

川魚が少なくなつた上に、水鳥が増えて魚が捕食され、ブラックバスなどによる被害も取りざたされるなど、事態は深刻であります。

このような悪循環を改善するためにも、魚影の濃い川づくりが大切であります。

子どもたちが、魚釣りを楽しむ中で、あの躍動感あふれる感動を体験し、生命の実態を知ってもらいたいものであります。

なぜなら、最近の電子ゲームでは、リセットボタンを押せば、死んだ人間が生き返るといった危険な感覚に慣れてしまい、安易に友達へ刃物を突きつけるといった悲惨な事件も発生するなど、愕然としてゐるからであります。

本市の貴重な宝であります児童・生徒の皆さんが、心身共に健やかに成長されることを願つてやみません。